

# 改訂された兵士 —マーク・トウェインの初期短編を巡って

A Soldier Revised:

The Deletion in Mark Twain's Short Stories in His Early Days

辻 和彦

## 1 はじめに

あらゆるものがアップロードされ、ダウンロードされ、検索され、ブログに書かれ、SNSに取り込まれ、スレッド化し、「つぶやかれる (twitter)」社会。私達が現在暮らす、こうした日常社会の延長線上には、いわゆる「電脳化」された未来が既にそれほど遠くない位置にある。しかしながら、いかにネットブックや情報ガジェット、もしくは今後登場するバイオネットワークがこれからの進歩を期待されているにせよ、あるいはいかに現代社会のティーンエイジャーにとって携帯電話やインターネットがもはやその「身体」の一部となっているにせよ、こうした「情報化社会」は、電子機器や電子ネットワークの登場によって、二十世紀後半に突如として出現したわけではない。

「情報化」、即ち情報の共有化やその迅速化は、文明発祥の古来から人類が目指してきたものであり、文字の発明や活版印刷、また電信、無線、ラジオの実用化といったものは、すべからく「情報化」社会の体現のためになされたことであった。特に新聞や雑誌の大量流通などを実現した高度印刷技術や、電信などの電子通信技術が確立した時期を考慮すると、「情報化社会」実現の最重要ターニングポイントはむしろ十九世紀であった、と述べても、決して偏った主張とは見なされないのではないか。

あらゆるものが“wired”され始めた時代に、新聞記者として文筆活動を始め、やがてアメリカを代表する作家となる Mark Twain (1835–1910 年) が辿った軌跡は、まさしく「情報化社会」の基礎が固められた流れと一致す

る。本論文では、主に彼の二編の初期短編を取り上げながら、「出版」、「情報流通」、「メディア」などとトウェインがいかに関わっていたか、またそれらの背景にどのようにジェンダーや現実政治が入り組んだ関係を形成していたのか、という問題の一端に焦点をあてたい。

## 2 喪われる兵士

中西部の町で生まれ、ミシシッピ河沿いのハンニバルで多感な少年時代を過ごした Samuel Laghorne Clemens が、初めて自らの文章に“Mark Twain”とサインしたのは1863年、西部でのことであり、これを境に彼が作家として順調に成長していったことは、既に多くの研究者が認めるところである。まもなく1865年に *Saturday Press* に発表された“Jim Smiley and His Jumping Frog”がアメリカ全国各地の新聞、雑誌等に転載されるほど人気となり、トウェインはやがてさらなる活動の場を求めて、東部の文壇へと移行することになる。

しかしながら特に指摘しておきたいのは、トウェインは既に「作家」の立場とは異なるポジションではあるものの、「文筆活動」に関わる上で必要な経験を豊富に積み重ねていたのである。彼は1862年から西部の新聞社で働いていたので、もちろん「ジャーナリスト」として出版業界についての知識を積み重ねつつあった。だがそれだけではなく、父がこの世を去った翌年の1848年から、12歳という早さで印刷工見習として働いていた彼は、印刷現場で物事がどのように動くか、という実際を肌身の感覚でもってよく理解していた。またその後蒸気船で勤務し、やがてパイロットとして、アメリカを南北に縦断する交通運輸の要の一環として働いた経験があることや、西部で鉱夫として仕事をしたことも、情報や物資の流通事情に敏い感性を創る要素となっていた。つまりトウェインは、作家としてその名前が売れる以前から、その後の爆発的な才能の開花を支えられるだけの十分な知的「体力」を得ていたのである。

そのような若きトウェインが1864年12月3日号の *Californian* に発表した短編“*Lucretia Smith's Soldier*”は、短い小品ながら、極めて意義深い作品である。というのは、メジャーデビュー作として扱われることの多い「跳び蛙」の発表以前に、完成度は多少劣るものの、テーマ、題材、構成、レトリックなどにおいてまったく見劣りすることのない作品を、既にトウェインが執筆していたということを裏付けるからである。

「ルクリシア・スミスの兵士」においては、マサチューセッツ州に暮らすレジナルドという男が、恋人の少女ルクリシアを想うところからストーリーが始められる。ただしその後やって来たルクリシアは、応募して兵士になっていないという理由でレジナルドを責め、弁解する暇も与えず去ってしまう。その後ルクリシアは、実はレジナルドは既に召集に応じており、兵士となって町を去ったことを知る。やがて彼女は死傷者名簿に彼の名前を見つけ、ワシントンの病院で、負傷して話すことができなくなった彼の看護を務める。だが包帯をとってみると、その男は別人であった。その後も本物のレジナルドは現れなかった。

極めて皮肉に書かれたこの「戦争体験談」は、いかにも実際の出来事であるかのように装われている。後に再度触れることになるが、物語の前に置かれた付言において、語り手は使用した様々な資料について語り、謝辞まで記している。ただ先に示したように、物語の筋においては、おそらくは当時の多くの読者の期待を裏切り、兵士となるレジナルドの勇敢さは少なくとも直接的には描かれず、「兵士の恋人」たるルクリシアの誠実さや優しさについても触れられない。劇的な再会も、その後には続くはずの救し合いや永遠の愛も、まったく存在しない。ただレジナルドという男性の不甲斐なさと、「戦場で赤い血潮をかき分ける」(Twain, *Collected* 1: 111) 兵士達の中に「自分の兵士」がいないということに苛立つルクリシアという女性のエゴイスティックな言動が記されるだけで、物語のラストで暗示されるのは、運命の皮肉さである。

### 3 失われる身体

トウェインは「ルクリシア・スミスの兵士」を発表する前に、同じく『カルフォルニアン』の1864年10月22日号に、やはり女性が主人公である短編を載せている。“Whereas”というタイトルを冠せられたこの物語は、トウェインの初の単行本である *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County, and Other Sketches* (1867年) において“*Aurelia's Unfortunate Young Man*”と題を変更され、その後他の短編集に収められる際もその題が踏襲された経緯があるので、本稿においても後者の名で呼ぶことにする。

「オレリアの不運な恋人」は、後のヴァージョンでは削除されることになる、語り手が或るパン屋の店名について一考する文章が先立ち、その後本題である、ある女性から来た相談の手紙が紹介される。手紙の中でオレリアと名乗るその女性は、自分の婚約者ブレッキンリッジが天然痘にかかってその美貌を失ったことを嘆く。悩みを乗り越えて結婚式を挙げようとしたところ、今度は彼は片足をなくすことになり、次には両腕をなくし、片目をなくし、もう一方の足をなくし、最後には「インディアン」に頭皮をはがれることになる。その度に式は延期され、悩める婚約者であるオレリアは語り手に、自身がいったいどうするべきか尋ねるのである。語り手は彼女に九十日待つことをアドバイスし、「状況の中で最善を尽くすしかないのだ」(96)と語りかけて、この救いようのない物語は幕を閉じる。

「ルクリシア・スミスの兵士」と同様に、この話もまたひたすらブラック・ジョーク的資質で充たされている。婚姻への願いを翻弄され続ける乙女オレリアは、重大な決意をする上で必要であるはずの、自らの強い意思というものを持たず、それ故に婚約者ブレッキンリッジと結婚するかどうかについて迷い続け、ただ運命を嘆く。一方、最後には「ほとんど三分の二」(95)になってしまうブレッキンリッジ自身の言葉はまったく記されず、不連続きの彼の胸のうちは描かれぬ。また語り手は「責任が重過ぎるので、示唆程度のことしかできない」(95)とはっきり述べており、深刻すぎる悩み相談に

対して及び腰であり、正面から答えようという誠意を持ち合わせていない。「状況の中で最善を尽くすしかない」という言葉は、「ルクリシア・スミスの兵士」の結末と同様、運命の皮肉さを映し出しているだけのようにも思える。

「人間の解体化」という主題を扱ったこの短編の背景には、言うまでもなく西部伝統の“tall tales”の強い影響があり、「跳び蛙」にしばしば同様の指摘がされていることを考え併せると、西部の雑誌に載せられたこの物語が、いかに西部の読者を意識しているか、ということをよく示していると言える。また類似の主題を持つ Edgar Allan Poe (1809–1849 年) の “How to Write a Blackwood Article” と “A Predicament” の連作 (1838 年) や、“The Man That Was Used Up” (1839 年) からの影響が否定し難いように考えられ、あるいはトウェインがより完成度が高く、より多くの読者層を惹き付けられる作品を書くために、目立つテーマや作品設定を前世代の作家達から意図的に採り入れていた証拠となりうるものかもしれない。

だがそうであるとしても、「オレリアの不運な恋人」の救いようのない結末とその空虚さは、ポーの作品のそれらとは質的に異なるし、また「トール・テール」にしては深刻すぎる。「ルクリシア・スミスの兵士」と全く同様に、「オレリアの不運な恋人」においても、何が風刺の標的とされ、どのようなものがそのやりきれない昏さをもたらしているか、ということを解明することが、「メジャーデビュー」以前のトウェインの心境やその周辺環境に光を投げかけることに繋がることになるはずである。

#### 4 新しい女性像の可能性

そのように考えるならば、近年の研究者達から提供されている「ジェンダー」の観点からのこの作品に対する読解は、この問題に関して確かに新しい視座を提供してくれる。

John Cooley は「ルクリシア・スミスの兵士」に登場するルクリシアが気

性が激しく、野心家であることを認めながら、十九世紀末の新しいジェンダー観を作品世界に映し出すようになったと言われる、晩年のトウェイン文学に登場する「主張が強いが自制的な」(Cooley 1) 女性キャラクターとの類似を指摘している。また「オレリアの不運な恋人」についても、「ジェンダーの示唆というものが興味深く、トウェインの後の「ニューガール」ストーリーを予感させる」(10) と述べている。

レジナルドの反応を一切無視して、誤解に基づく激しい怒りをぶつけるルクリシアが望むのは、戦場に「自分の兵士」がいるということだけであり、結局別人であることが判明する「負傷したレジナルド」の看護を行っている間も、それは変わらない。徹底して自分の感傷とエゴを貫き通すルクリシアという女性像は、一方では風刺対象として貶められているとも言えるが、クーリーの指摘の通り、単に男性に献身的に仕えるような従属の立場ではない、南北戦争後の新しいアメリカ人女性像を早くも捉えているとも考えられるのである。

同様に「オレリアの不運な恋人」においても、宙ぶらりんとなったブレッキンリッジとの関係の中で、ただひたすら婚姻について悩み続けるオレリアという女性は、ややもすれば愚鈍とも過度に感傷的とも見えるように設定されている。だが容易に答えが出ないはずの問いについて、孤独の中で考えをめぐらす彼女の姿は、ある種ハムレット的であるともいえなくもないであろうし、身体をどんどん失っていくレジナルドが運命の象徴として描かれているならば、オレリアは男性側の都合で翻弄される悲劇の女性主体そのものである<sup>(註1)</sup>。クーリーが示唆する通り、オレリアを、南北戦争後に出現する新世代の女性達の予兆として捉えるならば、この短編においては、独立した自我を持ちながらも、運命の過酷さ故に、もしくは父権の男性社会の巨大な圧力故に、その自我を持って自ら「判断」を下すことができない、新しい時代の女性の苦悩がリアルに描かれているとさえしてきすることも可能であろう。

また Peter Stoneley はフェミニズム美学の立場からこの二作品を分析しているが、これらが女性の修辭的慣習やそのセンチメンタリズムを風刺のターゲットとして選んでいると指摘しつつも、「ルクリシア・スミスの兵士」のような物語に、単なる嘲笑を超えるような意図があるならば、女性の持つ「優しい情熱」もどんな男らしさのイデオロギーとも同様に、急を要して鼓舞するはずのものだということを、確かに示しているのだ (Stoneley 33) とも述べている。ストリーの主張の背後には、これらの作品が国を割って行われた戦争である南北戦争中に書かれ、発表されていることへの配慮があると考えられるが、男性を戦場に送り出すことを切望しつつ、自らを強く恃む女性や、もはや頼りにはならなくなった男性の横で、不条理な運命と格闘する女性の姿をトウェインが確かに描き出していることを考慮すると、「ルクリシア・スミスの兵士」も「オレリアの不運な恋人」も、単に女性の感傷癖や優柔不断さを風刺した、もしくは当時の女性を巡る言説の中で目立っていたそうした特長を揶揄した、喜劇作家の初期デッサンであるとは言えないのではないだろうか。明らかにトウェインがこの二作品で、新たな女性像という未知の可能性を手探りしていることは事実であろう。

しかしながらそうであるならば、この二作品の全体像を探るため、ジェンダーの観点の分析に加え、その発表、流通の過程、並びにこれらを巡る歴史的背景をさらに分析する必要がある。

## 5 削除された文章

先に指摘した通り、「オレリアの不運な恋人」の冒頭のくだりは、短編集に収録された際にカットされているのであるが、ここまで述べたような観点からすると、見落とすべきではない箇所である。

この部分で語り手は、“Love’s Bakery” という珍妙な名のパン屋を発見した喜びを語り、その店名に関して冗長的に考えを巡らせるのであるが、このパン屋の二階には「若い女性のための予備校」(Twain, *Collected* 1 :

91)<sup>(註2)</sup> があると述べている。公にするにはぎりぎりの諧謔であり、後にこの部分が削除されたのは、話の「枕」にしてはやや長すぎることに、「主流作家」の仲間入りを果たすには多少危険なジョークが含まれていることが理由であろう。

だが日々「愛」を生産するパン屋の二階に、若い女性のための学校があるというのならば、その後に展開される話の中で、未来の夫が日々「失われていく」ことに悩む若い女性が描かれることの意味も当然変化してくる。オレリアの話は、若い女性にとっての一種のレッスンとして読むべきであり、国家が分裂の危機に瀕しているその時代に、1. 兵士として「失われる」可能性がある男性など、もはや経済的にも精神的にも必ずしも頼りにはならないこと、2. 「失われる」男性の傍らで、オレリアの如く、悲運を嘆いても、まったく生産的ではないこと、3. であるならば、まだ若い女性であろうとも「状況の中で最善を尽くすしかない」のである、といった女性の「自立」への道が間接的に説かれているのだ、と主張することもあながち不可能ではないだろう。いずれにしてもこのパン屋のくだりは、今日的には興味深い部分であり、本題と関係が薄いという理由で、論じるに値しないと断定を下すことはできない。

しかし実は、「ルクリシア・スミスの兵士」の方の出版事情はさらに興味深い。この物語も後に1867年の短編集『名高い跳び蛙』に収録されたのであるが、初出の『カルフォルニアン』に記載されたものから、若干の変更がなされていた。具体的には冒頭に置かれた付言がかなり短くされていたのであるが、この変更は或る目的のために意図的になされたものであった。以下において、オリジナルには存在したが、後にカットされることになった箇所の一部を引用する。

[NOTE FROM THE AUTHOR. — *Mr. Editor*. I am an ardent admirer of those nice, sickly war stories in *Harper's Weekly*, and



for the last three months I have been at work upon one of that character, which I now forward to you for publication..... The inspiration which enabled me in this production to soar so happily into the realms of sentiment and soft emotion, was obtained from the excellent beer manufactured at the New York Brewery, in Sutter street, between Montgomery and Kearny. And finally, to all those kind friends who have, by good deeds or encouraging words, assisted me in my labors upon this story of “Lucretia Smith’s Soldier”, during the past three months, and whose names are too numerous for special mention, I take this method of tendering my sincerest gratitude.  
M.T.]

(Twain, *Collected* 1 : 108)

Bruce Michelson は著書 *Printer’s Devil* の中でオリジナルの「ルクリシャ・スミスの兵士」を取り上げて、その歴史的意義を解説している。彼の研究によると、冒頭の付言における謝辞に、執筆のインスピレーションをもたらったという理由で、地元のビール会社 “New York Brewery” が含まれているのには、明らかに政治的に東部を意識した形跡があるという。また同じく冒頭において語り手が「私は『ハーパーズ・ウィークリー』に載っているような、あの素晴らしいが、気分が悪くなる戦争譚の熱烈な崇拝者なのです。」(108) という宣言をなす箇所も同様の意味を持つのであり、「南北戦争は地理的には彼方にあるのだが、ここではあくどいまでに机上に置かれている」(Michelson 71) と指摘している。『ハーパーズ・ウィークリー』は、Fletcher Harper によって創刊され、東部を代表する雑誌となった『ハーパーズ・マガジン』の週刊誌版であり、アメリカ全土の世論形成に大きな役割を担っていた。

マイケルソンはまた『ハーパーズ・ウィークリー』が「第二次世界大戦下のアメリカ人に対して『ライフ・マガジン』が演じたような、もしくは湾岸戦争時に『タイム』、『ニュースウィーク』、フォックス・ニュース、CNNが演じたような、文化的、政治的役割を引き受けていた」(70)と述べた上で、「南北戦争が始まった頃までには、アメリカ全土は広範囲に電信で結び付けられていた」(70)のであり、そうした「情報化社会」の基盤の上で流通する『ハーパーズ・ウィークリー』の影響力ある紙面において、「明らかに誤りではなく意図的に、事実と誤謬がブレンドされて」(74)おり、「この国家の大災害時において印刷された言説は、災害それ自体の一部であった」(75)と断罪している。南北どちらにも加担しないという意味で当時政治的空白地帯であった西部に文筆活動の拠点を置いていたトウェインにとって、いわば「中央」からの「指令」とも「洗脳」ともつかない戦意高揚の「情報操作」は、かなり苛立たしいことであったのは確かであろう。マイケルソンは「トウェインの関心と憤りは印刷された言葉に向いていたのであり、その内容と共に表現方法にあったのだ」(71)と述べ、「ルクリシア・スミスの兵士」は「ニューヨークや東部諸都市の印刷業界の帝国、または現場から離れている作家や出版関係者に対する、小さな地方反乱である」(76)と結論付けている。

だが彼の主張を手掛かりに再度「ルクリシア・スミスの兵士」の『カルフォルニアン』ヴァージョンと67年の短編集ヴァージョンを比較してみると、驚くべきことが見えてくる。改変された後のヴァージョンには、「ニューヨーク醸造所」への謝辞は存在しない。また『ハーパーズ・ウィークリー』への言及も削除されているのである<sup>(註3)</sup>。即ち、マイケルソンが主張するような、「西部」のトウェインが戦争の情報操作を行なう「東部メディア」の情報統治者への風刺を行なっている図は、後のヴァージョンからは完全に不可視となっている操作が行なわれたわけである。

もちろんこの「操作」には、67年の短編集出版の過程を見る限り、トウェ

イン自身の意思が働いていたと見るべきである。それではトウェインは「メジャーデビュー」以前に、実際のところは何に対して批判を行なおうとし、「主流」になった後には、何ゆえその怒りを「削除」することにしたのだろうか。

## 6 削除された前歴

こうした疑問に対する答えを得るためには、今一度マーク・トウェインという駆け出しの新聞記者が本当に「南北戦争から遠いところにいたか」という前提を確認しなければいけない。

もともと彼が育った中西部のミシシッピ河流域は、南部の影響が色濃くあった地域であり、南北戦争の発端ともなった奴隷制度も存在していた。文化的にも政治的にもトウェインは南部の影響下で少年時代を過ごしたわけであり、またその後彼が努力してその地位についた蒸気船パイロットという職種は、南北物資流通ルートにおけるスターであった。だが「奴隷制」や「プランテーション」といった「南部社会制度」を否定した北部との戦いにより、トウェインはそのスターの座から引きずり落とされ、それどころか食い扶持も失ってしまう。当時おそらくは憤慨した青年がとった手段は、南軍義勇兵部隊への従軍であった。後にトウェインは *Century* 誌に寄せた “The Private History of a Campaign That Failed” (1885年) の中で、この二週間ほどの従軍体験を語っているのだが、基本的に彼はその際以外にはほとんど自らの戦争体験を語りたがることはなかった。またユーモラスに書かれたこの喜劇的作品の中で、実際に彼が見た戦争がそのまま描かれているのには無理があるともいえる。

彼が兵士としての体験を語りたがらなかったのは無理もない。「跳び蛙」での成功以降、東部で「作家」として活動し始めた彼は、もはや「ワイルドな西部人新聞記者」でもなく、ましてや「敗戦の地である南部からの落武者」では毛頭なく、巧みなレトリックと機知で都市の洗練された人々を、講

演やエッセイで笑わせる成功者であった。その彼がさらなる成功の階段を登りつめていくためには、東部の出版業界とのコネクションや中央文壇との人脈が不可欠だったのであり、「戦争の現実」や「南部人の本音」などは隠し通さなければいけないものだった。

トウェインがかつて当て擦った『ハーパーズ・ウィークリー』関連の業界人達は、今や彼の重大なスポンサーでもあった。後に彼は『ハーパーズ・マガジン』にも『ハーパーズ・ウィークリー』にも自らの作品を寄稿するようになり、見事にその一員におさまることになる<sup>(註4)</sup>。その『ハーパーズ・マガジン』に連載コラムを持つなど、東部文壇に強い影響力を行使した William Dean Howells (1837-1920年) とのトウェインの親しい交友関係は有名であるが、少なくともこの交際の初期の段階では、新参者のトウェインはハウエルズのアドバイスや依頼を無下にするようなことはできなかった。1876年の大統領選の際にハウエルズは、自身の妻の従兄弟だった共和党候補 Rutherford B. Hayes (1822-93年) を応援するようトウェインに依頼し、彼はハートフォードで応援演説を行なうに至る。だがトウェインの胸中が複雑であったのは明らかだ。当時議論の種であった南部再建計画には共和党は概ね無関心であり、かつて南部の戦士として戦った彼の胸中の想いは、ヘイズの政策と一致しなかったであろうからである。だが『ハーパーズ・マガジン』の創始者フレッチャー・ハーパーの父親 James Harper が共和党政治家であったことから分かりますとおり、当時の東部出版業界には、急進的共和党支持者が多くおり、特に盟友のハウエルズ周辺はそうであった。この状況の中でトウェインが成功を望むならば、「跳び蛙」以前の自身を「削除」するか、「改訂」するかしかなかったのである。

後にトウェイン自身がその名付け親になる「金ピカ時代」(the Gilded Age) において、アメリカはますますの経済的発展を遂げ、コミュニケーション・ツールは人類史上未だかつてない規模とスピードで発展していく。トウェインが述べるには「個人使用としては自分こそが世界最初」であった

電話は見る間に普及し、二十世紀初頭にはアメリカ全土は電信のみならず電話線やラジオ放送網によっても「広範囲に結び付けられる」こととなる。こうした流れの中で、トウェインが本当に過去の自分を葬ることに成功したかどうかを見極めるのは非常に困難な作業であるし、また主旨からずれることであるので本稿では扱うつもりはない。ただ「ルクリシア・スミスの兵士」と「オレリアの不運な恋人」という二つの作品からは確実に、その後のマーク・トウェインという作家からは少なくとも直接発されることはなくなった、いわば本音が透けて見える。かの戦争のせいで職を失い、僅かの間ながら従軍した後、おそらくは絶望して自らは去ったものの、故郷の地が帰属する南軍の敗北を、遠方の西部から「活字」で目撃せねばならなかった屈辱感。逃げて辿り着いた、政治的「ニュートラル」の地であったはずの西部が、東部メディアの「情報操作」によって、支配され操られているという従属感。まさに「南部人」としての憎悪と「西部人」としての怒りが、これらの作品における風刺の原動力であり、戦意高揚の『ハーバーズ・ウィークリー』を読みつつ、実際は地元のものである「ニューヨーク・ビール」でも飲まない、この戦時下において正気は保てず、ただひたすら「状況の中で最善を尽くすしかない」のではないか、というのがこれらの物語の根底に存在する「皮肉」であるのかもしれない。

あるいは、1867年の初の単行本に、これらの短編を「改訂」して入れた瞬間、彼は二度目の敗戦を迎えたともいえる。一度目の敗戦が、自身が南軍義勇兵部隊から去った瞬間なのか、実際に戦争終結を西部で迎えた際であるのかを見極めるのも容易ではないが、少なくとも二度目の敗戦は、アメリカ全土が“wired”され、中央メディアがその中の情報をコントロールするようになった時代に、彼が皮肉屋だが正義感でもあった若者の衣を捨て去り、文豪マーク・トウェインとしての栄光の階段の第一歩を登り始めた瞬間、即ち「改訂」により過去の自分と別れを告げた瞬間であったのだ。

## 7 結びに

「ルクリシア・スミスの兵士」と「オレリアの不運な恋人」という二つの短編は、マーク・トウェインが「跳び蛙」により全国的に知られるようになる以前に執筆され、西部の地方雑誌に発表された作品である。どちらも女性を主人公に置きながら、従来の文学的伝統のものとは異なる女性像を描き出しており、そのこと自体も興味深いのであるが、今日的視点から読み直すならば、これらが「跳び蛙」の成功以後に短編集に収められた際、そこにかつて存在したはずの「危険」なジョークや、東部メディアへの風刺が消え失せていたことが極めて重要であると思われる。

トウェインとメディアの関連は、その言説の中を丹念に探っても、また実人生における関わりを再検討しても、十分おもしろいものである。本稿では残念ながら、その最も初期の交わりに光を投げかけただけに過ぎないが、その後成功したトウェインがメディアやその支配とどのような関係を構築したのか、またそれを作品中にいかにか映し出したのか、さらに晩年に出版に拘らなくなった彼が、どのようにそうした支配から逃れて自由かつ独自色の強い言説を編み出すに至ったのか、についてもいずれ別に論じたいと思う。

## 註

\* 本論文は概ね MLA 方式で執筆されている。特に作品名や作家名などの重要語句に関しては、初出にあたっては原語表記を心掛け、再出以降は日本語表記とした。またこの中で展開されている論考は、独立行政法人日本学術振興会による科学研究費補助金若手研究 B (課題番号:21720095) の助成を受けて、平成 21 年から行なわれている、「マーク・トウェイン文学とニューメディアの関連についての研究」と題した研究計画の一環であり、より大きな構想の一角となる予定である。

- 1 作品の中で運命として暗示されているのが南北戦争であるならば、いわゆる「銃後」の女性が主題であるとも考えられる。その場合、やはり「新しい女性像」確立の模索が、この短編において行なわれている可能性について注意すべきであろう。

- 2 近くに「若い男性のための予備校」もあり、実はどちらにも学生はいないと語り手は述べる (Twain, *Collected 1*: 92)。
- 3 1867年短編集のリプリント版で確認すると明らかである (Twain, *Celebrated 89-98*)。なおトウェインの描いた「新しい女性像」を紹介するはずの、John Cooley 編の *How Nancy Jackson Married Kate Wilson and Other Tales of Rebellious Girls and Daring Young Women* には、不思議なことに「ルクリシア・スミスの兵士」と「オレリアの不運な恋人」のどちらもオリジナル・ヴァージョンは採用されず、改変された後のヴァージョンのみが説明なしに載せられている。
- 4 『ハーバース・マガジン』の正しい名称は、*Harper's New Monthly Magazine* であり、1850年から発刊された。『ハーバース・ウィークリー』は1857年からである。*Harper's New Monthly Magazine* は1925年に *Harper's Magazine* と名を変え、経営母体は変わりながらも、現在までアメリカを代表する雑誌の一つとして君臨し続けている。

#### 引用・参考資料一覧 (抄)

- Cooley, John, ed. *How Nancy Jackson Married Kate Wilson and Other Tales of Rebellious Girls and Daring Young Women*. Lincoln: U of Nebraska P, 2001.
- Cummings, Sherwood. *Mark Twain and Science: Adventures of a Mind*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1988.
- Curry, Richard O., John G. Sproat, and Kenyon C. Cramer. *The Shaping of America*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1972.
- Day, A. Grove, ed. *Mark Twain's Letters from Hawaii*. London: Chatto and Windus, 1967.
- DeVoto, Bernard. *Mark Twain's America*. Boston: Little, Brown, 1997.
- Mabbott, Thomas Ollive, ed. *Edgar Allan Poe: Tales and Sketches*. 2 vols. Chicago: U of Illinois P, 2000. [Published as *Collected Works of Edgar Allan Poe*, Vol. 2-3. 1978.]

- Michaelson, Bruce. *Printer's Devil: Mark Twain and the American Publishing Revolution*. Berkeley: U of California P, 2006.
- Robinson, Forrest G., ed. *The Cambridge Companion to Mark Twain*. New York: Cambridge UP, 1995.
- . *In Bad Faith: The Dynamic Deception in Mark Twain's America*. Cambridge: Harvard UP, 1986.
- Rodney, Robert M. *Mark Twain International: A Bibliography and Interpretation of His Worldwide Popularity*. Westport: Greenwood, 1982.
- . *Mark Twain Overseas: A Biographical Account of His Voyages, Travels, and Reception in Foreign Lands, 1866–1910*. Washington, D.C.: Three Continents P, 1993.
- Rogers, Franklin, ed. *Mark Twain's Satires and Burlesques*. Berkeley: U of California P, 1967.
- Rosaldo, Renato. *Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis. With a New Introduction*. Boston: Beacon, 1993.
- Rosenheim, Shawn, and Stephen Rachman, eds. *The American Face of Edgar Allan Poe*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1995.
- Rothman, David J. *The Discovery of the Asylum: Social Order and Disorder in the New Republic*. Boston: Little, Brown and Company, 1971.
- Rotundo, E. Anthony. *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era*. New York: Basic, 1993.
- Stoneley, Peter. *Mark Twain and the Feminine Aesthetic*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Twain, Mark. *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County. and Other Sketches*. New York: Oxford UP, 1996.
- . *The Innocents Abroad.*. New York: Oxford UP, 1996.
- . *Life on the Mississippi*. New York: Oxford UP, 1996.



— . *Mark Twain: Collected Tales, Sketches, Speeches, and Essays*. 2 vols. New York: Library of America, 1992.